

人間の「労働」について

2010.7.27

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

はじめに：今月、子どもに関わって読んだ本

『手のうごきと脳のはたらき』（香原志勢、築地書館、1980年）

一。労働とはそもそも

- 1。「労働」が、人間らしさを育てた
人が、道具を使い、自然に働きかけ、環境を整えたり変えたりする。



それが、「労働」。

- * 人間は、労働なしには、生きていけません。私たちの身のまわりにあるものも、すべて労働によって得られています。
- * だから、「労働」というものを、深く理解することが、人間を理解することにつながります。

労働の起源は、人類の起源と同じでありまして・・・

- * ヒトは、猿から分かれて、2本足で立つように。
- * 「自由になった前足」が、「手」となります。
- * 人間の手は、“つかむ”“なげる”“ぶつける”“ひっぱる”“むしる”など、多面的に活用された。人間の手は、とても複雑な動きが可能で、繊細にできています。
- * そして、決定的なのは、道具の使用を行うことが可能になったということ。

道具の使用

- * 自然とのきびしい“素手でのたたかい”の中で、腕より長いものを、にぎりこぶしよりも硬いものを、つめよりもするどい武器を自然のなかに探し求め、腕のかわりに木の枝、にぎりこぶしのかわりに石のかけらを手にするようになった。自分の体の延長として。
- * 道具の特徴は、だんだん改良することができること。子孫に伝えられ、1代、また1代と、道具に改良が加えられ、種類もしだいに多くなっていった。道具の改良は、人間の自然に対する力をより大きくしていく。
- * 手によって何度も道具をつくり、使っているうちに、手はだんだんと器用さを身につけていきました。道具の製作・使用という労働が、手を精巧なものにしていたのです。

- * また脊椎動物は「顔」が進行方向の最先端に位置します。そこに、目、鼻、耳、舌、ヒゲなどの重要な感覚器官（外界の探索機能）がある。人間は 2 足歩行の結果、外部の探索行動における「手」の役割が大きくなりました。
- * 「道具の使用」「外部探索」の結果、手の神経が発達し、それが脳の発達をうながすという関係になります。その脳の発達が、複雑な指令を手を送るようになります。手の発達と脳の発達は、このように一体にしてすすんでいきました。
- * テレビを組み立て、パソコンのキーをたたき、字をさらさらと書き、ピアノをひきこなす手、そんな手を人類が最初からもっていたわけではありません。今日の人間の手は、何百万年という人間の労働の成果がつくりだしたのです。

芸術や文化も労働から生まれた

- * 道具をつくる過程で、その苦勞のなかで、自分のつくる道具 = 作品のでき具合に心が動くようになりました。さまざまな道具の製作をくり返すなかで、「もの」の「かたち」がうまくできあがったとき、心がはずみ「ああ、美しいな」という美的感情のようなものが芽生えました。こうした心の動きを、「理性」と区別して「感性」や「感情」といいます。
- * また、ときには労働の必要から、「図」や「絵」を描き、意思統一をしました。そのうち、その「図」がやがて見事な「作品」となり、美的感情もますます磨かれ、同時にその「図」を描く仕事に専念する人間、つまり「芸術家」を育てました。
- * やがて、舞踊や音楽、彫刻や絵画、さまざまなジャンルの芸術が分化発展し、一方でそれを鑑賞し、そこから生きる力を得る「鑑賞者」も育っていきました。
- * 考える力や科学と、感性・感情・芸術文化を一体として「人間の生きる力」として豊かに発展させてきたのが、人間の歴史であり、労働の歴史でもあった。

中間まとめ。「道具を目的意識的につくり、それを使用して自然環境に働きかける」こと、そして、もっぱらそのことによって自分や仲間の生存を維持する。このことを、「労働」と呼びます。



2. 労働をキーワードに、社会的な視野から、ものごとをみる なぜ蛇口をひねると「水」が出る？

- * 今朝起きた瞬間から、「どれだけの人の世話になっているか」を考えてみよう

無数の人びとの労働によって支えられて

- * 『いっぼんの鉛筆のむこうに』（谷川俊太郎文ほか、福音館書店）

「自分たちの地球が宇宙の中心だという考えにかじりついていた間、人類には宇宙の本当のことがわからなかったと同様に、自分ばかりを中心にして、物事を判断してゆくと、世の中の本当のことも、ついに知ることが出来ないでしまふ。大きな真理は、そういう人の眼には、決してうつらないのだ」

（吉野源三郎『君たちはどう生きるか』岩波文庫）

職業選択の自由

- * 身分制度から脱して。近代社会の特徴のひとつ。分業の発達。
- * 仕事の細分化、専門化。道具もそれによって、細分化・発達していく。

3. 社会を支える「働く人びと」 - その状況はどうか？

「私」の生活を支えている人びとのことを想像する

- * 生活はどうか？ 働き方はどうか？ その人の労働は尊ばれているか？

「生み出してくれる人がなかったら、それを味わったり、楽しんだりして消費することは出来やしない。生み出す働きこそ、人間を人間らしくしてくれるのだ。これは、何も食物とか衣服とかいう品物ばかりのことではない。学問の世界だって、芸術の世界だって、生み出してゆく人は、それを受取る人々より、はるかに肝心な人なんだ」(前掲書)

「労力一つをたよりに生きている人たちにとっては、働けなくなるということは、餓死に迫られることではないか。それなのに、残念な結果だが今の世の中では、からだをこわしたら一番こまる人たちが、一番からだをこわしやすい境遇に生きているんだ。粗末な食物、不衛生な住居、それに毎日の仕事だって、翌日まで疲れを残さないようになどと、ぜいたくなことは言っていない。毎日、毎日、追われるように働きつづけて生きてゆくのだ」(前掲書)

二。労働との深い関わり - 人間の「手」について



1. 人間の手はどんな働きをするか

こんなにイロイロできる

- * 書く、打つ、つかむ、なげる、ひっぱる、むしる、はじく、つまむ、おす、むすぶ、ふれる、なでる、抱く、つつむ、かきむしる、ひく、にぎる、さす、すくう…。

情報の伝達、道具の使用、他者との媒介

- * 手は「熱い」「硬い」「痛い」「形」など、たくさんの情報を脳へ伝える
- * 「道具」を使って対象に働きかける
- * 相手に物を渡したり、相手から受けとったりする、つまり「他者との媒介」にも。

手にまつわる言葉—日本語は「手」をたくさん使っている

- * 運転手、選手、助手、歌手、騎手、働き手、聞き手、やり手、手先、名手、相手、担い手、受け手、なり手…。「手」という言葉がそのまま人間をあらわすものとなっている。
- * 「手をぬく」「手伝い」「手をやく」「手がでる」「手ざわり」「手ほどき」「手さぐり」「上手・下手」「手堅い」「決め手」「手本にする」「手柄」「手にとるようにわかる」…

2. 子どもの発達と手

人間の赤ちゃんが得意な「あおむけ」「おすわり」

手遊び、お絵かき、自然とのふれあい

多様な道具の使用

手を自分の思いどおりに動かすー労働への道

* 「この子は、この手をつかって、どんな人になるのかな...」

『てとてとてとて』(浜田桂子さく、福音館書店)

* さまざまな役割や、喜怒哀楽を表現する「手」

『てをみてごらん』(中村牧江さく・林健造え、PHP)



3. 人間らしさと「手」

手は、心とつながれている - 「手」をどう使うかは、その人しだい

* 『わたしの手はおだやかです』

(アマンダ・ハーン文、マリナ・サゴナ絵、谷川俊太郎訳、に在るぶっくす)

手仕事の魅力とあたたかみ

「そもそも手が機械と異なる点は、それがいつも直接に心と繋がれていること
にあります。機械には心がありません。これが手仕事に不思議な働きを起こさせる
所以(ゆえん)だと思います。手はただ動くのではなく、いつも奥に心が控えて
いて、これがものを創らせたり、働きに悦びを与えたり、また道徳を守らせたり
するのであります」(『手仕事の日本』柳宗悦、岩波文庫、1985年)

手はあたたかい - 手をつなぐのは人間だけ

* 触れることによる肉体的・心理的效果

* いま、ここに「いる」「ある」と実感的に感じる

『癒しの手』は、相手の手をじっと握ったり、抱きしめたりする。不安な人を安
心させ、落ち込んでいる人を元気づけ、悩める人に共感する。薬のように特異的
に作用するのではなく、言葉のようにストレートに作用するわけでもなく、じわ
じわと体に染み込んでいくような効き方だ。だから『癒しの手』に触れられた人
は、その手の温もりが『身に染みる』のである」

(山口創『子どもの「脳」は肌にある』光文社新書)

今回は、人間の「社会」について考えていきたいと思います。